

吾輩は猫である

夏目漱石

吾輩は猫である。名前はまだない。

どこで生まれたかとお見当がつかぬ。なんでも薄暗いじめじめした所でニャーニャー鳴いていたことだけは記憶している。吾輩はここで初めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中でいちばん獐悪な種族であったそうだ。この書生というのはときどき我々を捕まえて煮て食うという話である。しかしその当時はなんという考えもなかったから別段恐ろしいとも思わなかった。ただ彼ののひらのにせられてスーと持ち上げられたときなんだからフワフワした感じがあったばかりである。てのひらの上で少し落ち着いて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始めであろう。このとき妙なものだと思った感じが今でも残っている。だいち毛をもって裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるでやかんだ。その後猫にもだいぶ会ったがこんな猫には一度もでくわしたことがない。のみならず顔のまん中が余りに突起している。そうしてその穴の中からときどきふうふうと煙を吹く。どうもむせぼくて実に弱った。これが人間ののむたばこというものであることはようやくこの頃知った。

この書生のてのひらの内でしばらくはよい心持ちに座っておったが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのかわからないがむやみに目が回る。胸が悪

くなる。とうてい助からないと思っていると、どきりと音がして目から火が出た。それまでは記憶しているがあとはなんのことやらいくら考え出そうとしてもわからない。

ふと気がついてみると書生はいない。たくさんおった兄弟が一匹も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまった。そのうえ今までの所とは違ってむやみに明るい。目を開いていられぬくらいだ。はてななんでも様子がおかしいと、のそのそはい出してみると非常に痛い。吾輩はわらの上から急に笹原の中へ捨てられたのである。

ようやくの思いで笹原をはい出すと向こうに大きな池がある。吾輩は池の前に座ってどうしたらよからうと考えてみた。べつにこれという分別も出ない。しばらくして鳴いたら書生がまた迎いに来てくれるかと考えた。ニャー、ニャーと試みにやってみたが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかかる。腹が非常にへってきた。鳴きたくても声が出ない。しかたがない、なんでもよいから食い物のある所まで歩こうと決心をしてそろりそろりと池を左に回り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりにはってゆくとようやくのことでなんとなく人間臭い所へ出た。ここへ入ったら、どうにかなると思って竹垣の崩れた穴から、とある邸内に潜り込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかもしれないのである。一樹の陰とはよくいったものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣の三毛を訪問するときの通路になっている。さて屋敷へは忍び込んだもののこれから先どうしていいかわからない。そのうちに暗くなる、腹はへる、寒さは寒し、雨が降ってくるという始末でもう一刻の猶予ができなくなった。しかたがないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へと歩いてゆく。今から考えるときは既に家の中に入ってあったのだ。ここで吾輩はかの書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に会ったのがお

4 【書生】学生。また、他の家で家事を手伝いながら学問をする人。

15 【一樹の陰】たまたま同じ木陰に宿るのも前世からの因縁によるという意味。
20 【おさん】おさんどん。雇われて家事や雑用をする女性の使用人のうち、主に台所仕事をする者。

さんである。これは前の書生よりいっそう乱暴なほうで吾輩を見るやいなやいきなり首筋をつかんで表へ放り出した。いやこれはだめだと思ったから目をねぶって運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのはどうしても我慢ができん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へはい上がった。するとまもなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されてはい上がり、はい上がっては投げ出され、なんでも同じことを四、五遍繰り返したのを記憶している。そのときにおさんという者はつくづくいやになった。このあいだおさんのさんまを盗んでこの返報をしてやっから、やっ胸のつかえが下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、このうちの主人が騒々しいなんだと言いながら出てきた。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの子猫がいくら出しても出してもお台所へ上がってきて困りますと言う。主人は鼻の下の黒い毛をひねりながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、やがてそんなら内へ置いてやれと言ったまま奥へ入ってしまった。主人は余り口をきかぬ人と見えた。下女は悔しそうに吾輩を台所へ放り出した。かくして吾輩はついにこのうちを自分のすみかと決めることにしたのである。

吾輩の主人はめつたに吾輩と顔を合わせることはない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に入ったぎりほとんど出てくることがない。家の者は大変な勉強家だと思っている。当人も勉強家であるかのごとく見せている。しかし実際はうちの者が言うような勤勉家ではない。吾輩はときどき忍び足に彼の書齋をのぞいてみるが、彼はよく昼寝をしていることがある。ときどき読みかけてある本の上によだれを垂らしている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活発な兆候を表している。そのくせに大飯を食う。大飯を食ったあとでタカジャスターゼを飲む。飲んだあとで書物を広げる。二、三ページ読むと眠くなる。よだれを本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながらときどき考えることがある。教師と

いうものは実に楽なものだ。人間と生まれたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでもできぬことはない。それでも主人に言わせると教師ほどつらいものはない。そうで彼は友達に来るたびになんとかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこのうちへ住み込んだ当時は、主人以外の者には甚だ不人望であった。どこへ行ってもはねつけられて相手にしてくれ手がなかった。いかに珍重されなかったかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでもわかる。吾輩はしかたがないから、できうる限り吾輩を入れてくれた主人のそばにすることを努めた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きというわけではないが別にまい手がなかったからやむを得ないのである。その後いろいろ経験のうえ、朝は飯びつの上、夜はこたつの上、天気の良い日は縁側へ寝ることとした。しかしいちばん心持ちのいいのは夜に入っこのうちの子供の寝床へ潜り込んで一緒に寝ることである。この子供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入ってひと間へ寝る。吾輩はいつでも彼らの中間に己を容るべき余地を見いだしてどうか、こうにか割り込むのであるが、運悪く子供の一人が目覚めますが最後大変なことになる。子供は——殊に小さいほうが悪い——猫が来た猫が来たと言って夜中でもなんでも大きな声で泣きだすのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず目を覚まして次の部屋からとび出してくる。現にせんだってなどはものさして尻べたをひどくたたかされた。

吾輩は人間と同居して彼らを観察すればするほど、彼らはわがままなものだと断言せざるをえないようになった。殊に吾輩がときどき同衾する子供のごときに至っては言語道断である。自分のかつてなときは人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、放り出したり、へっついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩のほうで少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追い回し

2 【ねぶる】 つぶる。
8 【下女】 雇われて家事や雑用をする女性の使用人。
17 【胃弱】 胃のはたらきが弱い状態。
18 【タカジャスターゼ】 消化剤。

9 【飯びつ】 炊きあがった飯をかまから移して入れておく、木でできた容器。
18 【同衾】 同じ布団で一緒に寝ること。
19 【へっつい】 かまど。

て迫害を加える。このあいだもちよつと畳で爪を研いだら細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で人が震えていてもいっこう平気なものである。吾輩の尊敬する筋向この白君などは会うたびごとに人間ほど不人情なものはないと言つておられる。白君は先日玉のような子猫を四匹産まれたのである。ところがそのうちの書生が三日めにそいつを裏の池へ持つていって四匹ながら捨ててきたそう。白君は涙を流してその一部始終を話したうえ、どうしても我ら猫族が親子の愛を全くして美しい家族的生活をするには人間と戦つてこれを剿滅せねばならぬと言われた。いちいちもつとも議論と思う。また隣の三毛君などは人間が所有権ということを解していないと言つて大いに憤慨している。元来我々同族間ではめざしの頭でもぼらのへそでもいちばん先に見つけた者がこれを食う権利があるものとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えてよいくらいのものだ。しかるに彼ら人間は毫もこの觀念がないとみえて我らが見つけたごちそうは必ず彼らのために掠奪せらるるのである。彼らはその強力を頼んで正当に吾人が食うべきものを奪つてしましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人をもっている。吾輩は教師のうちに住んでいるだけ、こんなことに関すると両君よりもむしろ楽天である。ただその日その日がかこうにか送られればよい。いくら人間だつて、そういつまでも榮えることもあるまい。まあ氣を長く猫の時節を待つがよからう。

わがままで思い出したからちよつと吾輩のうちの主人がこのわがままで失敗した話をしよう。

元来この主人は何といつて人に優れてできることもないが、なんにでもよく手を出したがる。俳句をやつてほどとぎすへ投書をしたり、新体詩を明星へ出したり、間違いだらけの英文を書いたり、ときによると弓に凝つたり、謡を習つたり、またあるときはバイオリンなどをブーブー鳴らしたりするが、氣の毒なことには、どれもこれもものになつておらん。そのくせやりだすと胃

弱のくせにいやに熱心だ。後架の中で謡をうたつて、近所で後架先生とあだ名をつけられているにも関せずいっこう平気なもので、やはりこれは平宗盛にて候を繰り返している。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいである。この主人がどういつか考へになったものか吾輩の住み込んでからひと月ばかりのちのある月の月給日に、大きな包みを提げて慌ただしく帰つてきた。何を買つてきたのかと思うと水彩絵の具と毛筆とワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵を描く決心とみえた。果たして翌日から当分の間というものは毎日毎日書齋で昼寝もしないで絵ばかり描いている。しかしその描きあげたものを見ると何を描いたものやら誰にも鑑定がつかない。当人も余りうまくないと思つたものか、ある日その友人で美学とかをやっている人が来たときに下のような話をして聞かされた。

「どうもうまく描けないものだね。人を見るとなんでもないようだが自ら筆を執つてみると今さらのように難しく感ずる。」これは主人の述懐である。なるほど偽りのないところだ。彼の友は金縁の眼鏡越しに主人の顔を見ながら、「そうはじめから上手には描けないさ、だいいち室内の想像ばかりで絵が描けるわけのものではない。昔イタリーの大家アンドレア・デル・サルトルが言ったことがある。絵を描くならなんでも自然そのものを写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに鳥あり。走るに獣あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだ君も絵らしい絵を描こうと思つならちと写生をしたら。」

「へえアンドレア・デル・サルトルがそんなことを言つたことがあるかい。ちつとも知らなかった。なるほどこりやもつともだ。実にそのとおりで。」と主人はむやみに感心している。金縁の裏には嘲るような笑ひが見えた。

その翌日吾輩は例のごとく縁側に出て心持ちよく昼寝をしていたら、主人が例になく書齋から

③
1 【細君】妻。親しい人と話す際に自分や相手の人の妻を指している言葉。現在ではあまり使わない。
2 【四匹ながら】四匹とも皆。
3 【全くして】完全なものにして。
4 【剿滅】すっかり滅ぼすこと。
5 【ぼらのへそ】ぼらの胃のこと。
6 【毫も】ほんの少しも。
7 【吾人】我々。
8 【代言】代言人の略。弁護士の古い言い方。
9 【ほととぎす】俳句雑誌。
10 【新体詩】明治時代に、西洋の詩歌の影響を受けて作られた詩。
11 【明星】文芸雑誌。
12 【謡】能楽の歌詞に節をつけて歌うこと。

1 【後架】トイレ。
2 【これは平宗盛にて候】謡曲「熊野」の冒頭。
3 【ワットマン】厚くて純白な上等の画用紙。
4 【美学】自然界や芸術作品に表れた美を研究する学問。
5 【下のような】次のよう。
6 【イタリー】イタリア。
7 【アンドレア・デル・サルトル】[1866-1937] イタリアの画家。
8 【星辰】星。
9 【露華】花のように美しい露。
10 【寒鴉】冬のからす。
11 【一幅の「幅」】は、掛け軸などを数える言葉。一軸の。

出てきて吾輩の後ろで何かしきりにやっている。ふと目が覚めて何をしているかと一分ばかり細目に目を開けて見ると、彼は余念もなくアンドレア＝デル＝サルトを決めこんでいる。吾輩はこのありさまを見て覚えす失笑するのを禁じえなかった。彼は彼の友に揶揄せられたる結果としてまず手始めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩は既に十分寝た。あくびがしたくてたまらない。しかしせっかく主人が熱心に筆を執っているのを動いては気の毒だと思つて、じつとしんぼうしておつた。彼は今吾輩の輪郭を描きあげて顔のあたりを彩っている。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乗のできてではない。背といい毛並みといい顔の造作といいあえて他の猫にまさるとは決して思つておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とは、どうしても思われぬ。だいいち色が違う。吾輩はペルシャ産の猫のごとく黄を含める淡灰色に漆のごとき斑入りの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑うべからざる事実と思つ。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければとび色でもない、さればとてこれらを混ぜた色でもない。ただ一種の色であるといふよりほかに評し方のない色である。そのうえ不思議なことは目が無い。もつともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが目らしいところさえ見えないから目が見えない猫だか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア＝デル＝サルトでもこれではしようがないと思つた。しかしその熱心には感服せざるをえない。なるべくなら動かずにおつてやりたいと思つたが、さっきから小便がもよおしている。身内の筋肉はむずむずする。もはや一分も猶予がでぬ仕儀となつたから、やむをえず失敬して両足を前へ存分にして、首を低く押し出してあゝと大なるあくびをした。さてこうなつてみると、もうおとなしくしていてもしかたがない。どうせ主人の予定はぶち壊したのだから、ついでに裏へ行つて用を足そうと

20

思つてのそのそはい出した。すると主人は失望と怒りをかき混ぜたような声をして、座敷の中から「このばかやろう。」とどなつた。この主人は人を罵るときは必ずばかやろうというのが癖である。他に悪口の言いようを知らないのだからしかたがないが、今までしんぼうした人の気も知らないで、むやみにばかやろう呼ばわりは失敬だと思つ。それも平生吾輩が彼の背中へ乗るときに少しはいい顔でもするならこの漫罵も甘んじて受けるが、こつちの便利になることはなにひとつ快くしてくれたこともないのに、小便に立ったのをばかやろうとはひどい。元来人間というのは自己の力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出てきていじめてやらなくはこの先どこまで増長するかわからない。

5

わがままもこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にしたことがある。

10

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園がある。広くはないがさっぱりとした心持ちよく日の当たる所だ。うちの子供が余り騒いで楽々昼寝のできないときや、余り退屈で腹かげんのよくないおりなどは、吾輩はいつでもここへ出て浩然の気を養うのが例である。ある小春の穏やかな日の二時頃であったが、吾輩は昼飯後快く一睡したのち、運動かたがたこの茶園へと歩を運ばした。茶の木を一本一本嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまで来ると、枯れ菊を押し倒してその上に大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づくのもいっこう心づかざるごとく、また心づくも無頓着なるごとく、大きないびきをして長々と体を横たえて眠っている。人の庭内に忍び入るたる者がかくまで平気に眠られるものかと、吾輩はひそかにその大胆なる度胸に驚かざるをえなかつた。彼は純粹の黒猫である。僅かに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に投げかけて、きらきらするにこ毛の間より目に見えぬ炎でも燃えいずるように思われた。彼

20

15

- 1 【一分ばかり】ごく僅かに。
- 2 【決めこむ】そのつもりになつて、そのようにふるまう。
- 3 【揶揄】皮肉などを言つてからかうこと。
- 7 【上乗の】大変よい。
- 10 【斑入り】他の色と違った色がまだらに混じっていること。
- 12 【とび色】こげ茶色。

- 5 【漫罵】みだりに罵ること。
- 7 【慢じて】おごりたかぶつて。
- 11 【坪】面積の単位。一坪は約三・三平方メートル。
- 13 【浩然の気】物事から解放され、ゆったりとした気持ち。
- 13 【小春】陰曆十月のこと。
- 16 【前後不覚】眠気などのために、そのときの前後のことが全くわからなくなること。
- 20 【にこ毛】柔らかな毛。

は猫中の大王ともいふべきほどの偉大なる体格を有している。吾輩の倍は確かにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して余念もなく眺めていると、静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝をかく誘ってばらばらと二、三枚の葉が枯れ菊の茂みに落ちた。大王はかっとそのまん丸の目を開いた。今でも記憶している。その目は人間の珍重する琥珀というものよりもはるかに美しく輝いていた。彼は身動きもしない。双眸の奥から射るごとき光を吾輩の矮小なる額の上に集めて、おめえはいったい何だと言った。大王にしては少々言葉が卑しいと思ったがなにしろその声の底に犬をもひしぐべき力がこもっているので吾輩は少なからず恐れを抱いた。しかし挨拶をしないと剣呑だと思ったから「吾輩は猫である。名前はまだない。」となるべく平気を装って冷然と答えた。しかしこのとき吾輩の心臓は確かに平時よりも激しく鼓動しておった。彼は大いに軽蔑せる調子で「なに、猫だ？ 猫が聞いてあきれあ。ゼンてえどこに住んでるんだ。」ずいぶん傍若無人である。「吾輩はこの教師のうちにいるのだ。」どうせそんなことだろうと思った。いやに痩せてるじゃねえか。」と大王だけに気炎を吹きかける。言葉つきから察するとどうも良家の猫とも思われぬ。しかしその脂ぎって肥満しているところを見るとごちそうを食ってるらしい、豊かに暮らしているらしい。吾輩は「そういう君はいったい誰だい。」と聞かざるをえなかった。「俺あ車屋の黒よ。」昂然たるものだ。車屋の黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋だけに強いばかりでちっとも教育がないから余り誰も交際しない。同盟敬遠主義の的になっているやつだ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起こすと同時に、一方では少々軽侮の念も生じたのである。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるかを試してみようと思つて左の問答を試してみた。

20

- 2 【佇立】 たたずむこと。
- 3 【梧桐】 アオギリ。アオイ科の落葉高木。
- 3 【かくく】 軽く。
- 5 【琥珀】 大昔の木のやにが、地中で石のようになったもの。赤茶色や黄色で艶がある。
- 5 【双眸】 両目の瞳。
- 6 【矮小なる額】 小さくて狭い額。
- 7 【犬をもひしぐ】 非常に力強いさま。一般的には「鬼をもひしぐ」だが、それを猫の視点から言い換えている。
- 8 【剣呑だ】 危なくて不安だ。
- 11 【ゼンてえ】 ゼんたい。いたい。
- 12 【気炎】 燃え上がるように盛んな意気。
- 15 【昂然】 たかぶる気持ちを抑えることもしない様子。

「車屋のほうが強いに決まっていらいらあな。おめえのうちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ。」

「君も車屋の猫だけにだいぶ強そうだ。車屋にいるとごちそうが食えるとみえるね。」

「なあにおれなんぎ、どこの国へ行ったって食い物に不自由はしねえつもりだ。おめえなんかも茶畑ばかりぐるぐる回っていねえで、ちっと俺のあとへくっついてきてみねえ。ひと月とたたねえうちに間違えるように太れるぜ。」

「追つてそう願うことにしよう。しかしうちは教師のほうが車屋より大きいのに住んでいるように思われる。」

「べらぼうめ、うちなんかいくら大きくたって腹の足しになるもんか。」

彼は大いにかんしゃくに障った様子で、寒竹をそいだような耳をしきりとびくつかせて荒らかに立ち去った。吾輩が車屋の黒と知己になったのはこれからである。

その後吾輩はたびたび黒と邂逅する。邂逅するごとに彼は車屋相当の気炎を吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒から聞いたのである。

ある日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶畑の中で寝転びながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話をさも新しそうに繰り返したあとで、吾輩に向かって下のごとく質問した。「おめえは今までにねずみを何匹捕ったことがある。」知識は黒よりもよほど発達しているつもりだが腕力と勇氣とに至ってはどうも黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この問いに接したるときは、さすがにきまりがよくはなかった。けれども事実は事実で偽るわけにはゆかないから、吾輩は「実は捕ろう捕ろうと思つてまだ捕らない。」と答えた。黒は彼の鼻の先からぴんと突っぱっている長いひげをびりびりと震わせて非常に笑った。元来黒は自慢をするだけ

20

- 9 【べらぼう】 相手を罵る言葉。
- 10 【荒らかに】 荒々しく。
- 11 【知己】 知人。
- 12 【邂逅】 思いがけなく出会うこと。

15

にどこか足りないところがあって、彼の気炎を感じたように喉をころころ鳴らして謹聴して
いれば甚だ御しやすい猫である。吾輩は彼と近づきになってからすぐにこの呼吸を飲み込んだ
からこの場合にもなまじい己を弁護してますます形勢を悪くするのも愚である、いっそのこと
彼に自分の手柄話をしゃべらしてお茶を濁すにしくはないと思案を定めた。そこでおとなしく
「君などは年が年であるからだいぶん捕ったろう。」とそそのかしてみた。果然彼は墻壁の欠所
に突貫してきた。「たんとでもねえが三、四十は捕ったろう。」とは得意げなる彼の答えであった。
彼はなお語を続けて「ねずみの百や二百は一人でいつでも引き受けるがいたち、ってえやつは手に
合わねえ。一度いたちに向かつてひどいめに遭った。」「へえなるほど。」と相づちをうつ。黒は
大きな目をばちつかせて言う。「去年の大掃除のときだ。うちの亭主が石灰の袋を持って縁の下
へはい込んだらおめえ大きないたちのやろうがめんくらってとび出したと思ひねえ。」「ふん。」
と感心してみせる。「いたち、ってけども、なにねずみの少し大きいぐれえのものだ。こんちき
しょうって気で追っかけてとうとうどぶの中へ追い込んだと思ひねえ。」「うまくやったね。」と
喝采してやる。「ところがおめえいぎってえ段になるとやつめ最後っぺをこきやがった。臭えの
臭くねえのってそれからってえものはいたちを見ると胸が悪くならあ。」彼はここに至ってあた
かも去年の臭気を今なお感ずることく前足を上げて鼻の頭を二、三遍まで回した。吾輩も少々
気の毒な感じがする。ちっと景気をつけてやろうと思つて「しかしねずみなら君ににらまれては
百年めだろ。君は余りねずみを捕るのが名人でねずみばかり食うものだからそんなに太って色
艶がいいのさろ。」黒の機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反対の結果を呈出した。彼
は喟然として大息して言う。「考えるとつまらねえ。いくら稼いでねずみを捕ったって——いっ
てえ人間ほどふてえやつは世の中にいねえぜ。人の捕ったねずみをみんな取り上げやがって交番

へ持ってゆきやあがる。交番じゃ誰が捕ったかわからねえからそのたんびに五錢ずつくれるじゃ
ねえか。うちの亭主なんか俺のおかげでもう一円五十錢くらいもつけていやがるくせに、ろくな
ものを食わせたこともありやしねえ。おい人間でものあてのいい泥棒だぜ。」さすが無学の黒
もこのくらいの理屈はわかるとみえてすこぶる怒った様子で背中の毛を逆立てている。吾輩は
少々気味が悪くなったからいいかげんにその場をこまかしてうちへ帰った。このときから吾輩は
決してねずみを捕るまいと決心した。しかし黒の子分になってねずみ以外のごちそうをあさって
歩くこともしなかった。ごちそうを食うよりも寝ていたほうが気楽でいい。教師のうちにいると
猫も教師のような性質になるとみえる。用心しないと今に胃弱になるかもしれない。
教師といえは吾輩の主人も近頃に至ってはとうてい水彩画において望みのないことを悟ったも
のとみえて十二月一日の日記にこんなことを書きつけた。

〇〇という人に今日の会で初めて出会った。あの人はだいたい放蕩をした人だといふがなる
ほど通人らしい風采をしている。こういうたちの人は女に好かれるものだから〇〇が放蕩
をしたというよりも放蕩をするべく余儀なくせられたというのが適當であろう。あの人の
細君は芸者だそうだが、羨ましいことである。元来放蕩家を悪くいう人の大部分は放蕩をす
る資格のない者が多い。また放蕩家をもって自任する連中のうちにも、放蕩する資格のな
い者が多い。これらは余儀なくされないのに無理に進んでやるのである。あたかも吾輩の
水彩画におけるがごときものでとうてい卒業する気づかいはない。しかるにも閑せず、自
分だけは通人だと思つてすましている。料理屋の酒を飲んだり待合へ入るから通人となり
うるといふ論がたつなら、吾輩もひとかどの水彩画家になりうる理屈だ。吾輩の水彩画の
ごときは描かないほうがましであると同じように、愚昧なる通人よりも山出しの大やぼ

1 【謹聴】敬意をもって注意深く聞くこと。
4 【お茶を濁す】いいかげんなことを言うなどしてその場をこまかす。
4 【しくはない】及ぶものはない。
5 【果然】案の定。
5 【墻壁の欠所に突貫してきた】壁の破れめへ脇目もふらず攻め入ること。ここは、黒が吾輩の思いどおり
に話ののってきたことを指す。
18 【呈出する】現す。示す。
19 【喟然】ため息をつく様子。

1 【交番へ……五錢ずつくれる】ねずみが伝染病を媒介するとして、ねずみを捕ることを推奨し、交番で買いあげていたことを指す。
11 【放蕩】しなければならぬことをせず、お金を使って遊び回ること。
12 【通人】人情をよく心得ていてさばけた人。
15 【自任】自分の役割や才能などを、これこそが自分だと思つこと。
18 【待合】待合茶屋のこと。飲食をしたり、芸者に来てもらったりするための席を貸す場所。
20 【愚昧】知識の程度が低い様子。
20 【山出し】田舎者。

ほうがはるかに上等だ。

通人論はちょっと首肯しかねる。また芸者の細君を羨ましいなどというところは教師としては口にすべからざる愚劣の考であるが、自己の水彩画における批評眼だけは確かなものだ。主人はかくのごとく自知の明あるにも関せずそのうぬぼれ心はなかなか抜けぬ。中二日おいて二月四日の日記にこんなことを書いています。

ゆうべは僕が水彩画を描いてどうていものにならんと思っていて、そこらに放っておいたのを誰かが立派な額にして欄間に掛けてくれた夢を見た。さて額になったところを見ると我ながら急に上手になった。非常にうれしい。これなら立派なものだと一人で眺め暮らしていると、夜が明けて目が覚めてやはりもとのとおり下手であることが朝日とともに明瞭になってしまった。

主人は夢の内まで水彩画の未練をしょって歩いているとみえる。これでは水彩画家は無論夫子のいわゆる通人にもなれないたちだ。

主人が水彩画を夢に見た翌日例の金縁眼鏡の美学者が久しぶりで主人を訪問した。彼は座につくと劈頭第一に「絵はどうかね。」と口をきった。主人は平気な顔をして「君の忠告に従って写生を努めているが、なるほど写生をすると今まで気のつかなかった物の形や、色の精細な変化などがよくわかるようだ。西洋では昔から写生を主張した結果今日のように発達したものと思われる。さすがアンドレア・デル・サルトルだ。」と日記のことはおく、びにも出さないで、またアンドレア・デル・サルトルに感心する。美学者は笑いながら「実は君、あれはてならめだよ。」と頭をかく。「何が。」と主人はまだ偽られたことに気がつかない。「何がって君のしきりに感服しているアンドレア・デル・サルトルさ。あれは僕のちょっと捏造した話だ。君がそんなに真面目に信じよう

とは思わなかったハハハハ。」と大喜悦のいでである。吾輩は縁側でこの対話を聞いて彼の今日

の日記にはいかなることが記さるであろうかとあらかじめ想像せざるをえなかった。この美学者はこんないかげんなことを吹きちらして人を担ぐのを唯一の楽しみにしている男である。彼はアンドレア・デル・サルトル事件が主人の情線にいかなる響きを伝えたかを毫も顧慮せざるものごとく得意になって下のようなことをしゃべった。「いやときどき冗談を言う人と人が真に受けるので大いに滑稽的美感を挑発するのはおもしろい。せんだってある学生にニコラス・ニックルベールがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる仏国革命史を仏語で書くのをやめにして英文で

出版させたと言ったら、その学生がまたばかに記憶のよい男で、日本文学会の演説会で真面目に僕の話したとおりを繰り返したのは滑稽であった。ところがそのときの傍聴者は約百名ばかりであったが、皆熱心にそれを傾聴しておった。それからまだおもしろい話がある。せんだってある文学者のいる席でハリソンの歴史小説セオファーンの話が出たから僕はあれは歴史小説のうちで白眉である。殊に女主人公が死ぬところは鬼気人を襲うようだと言ったら、僕の向こうに座っている知らんと言ったことのない先生が、そうそうあすこは実に名文だと言った。それで僕はこの男もやはり僕同様この小説を読んでおらないということを知った。「神経胃弱性の主人は目を丸くして問いかけた。「そんなでたらめを言っても相手を読んでいたらどうするつもりだ。」

あたかも人を欺くのは差し支えない、ただ化けの皮が表れたときは困るじやないかと感じたものごとくである。美学者は少しも動じない。「なにそのときや別の本と間違えたとかなんとか言うばかりさ。」と言ってけらけら笑っている。この美学者は金縁の眼鏡はかけているがその性質が車屋の黒に似たところがある。主人は黙って日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇氣はないと言わんばかりの顔をしている。美学者はそれだから絵を描いてもだめだという目つきで「しか

4 【自知の明】自分のことを公平に判断する聡明さ。
7 【欄間】和室で採光や換気のために、天井と鴨居の間に格子などをはめた部分。

11 【夫子】賢者や先生などを尊敬するという言葉。
14 【劈頭】物事のいちばん最初。

17 【おくびにも出さない】心にあることを少しも外に出さない。

6 【ニコラス・ニックルベール】イギリスの作家チャールズ・ディケンズの小説に出てくる主人公。
7 【ギボン】エドワード・ギボン [1737-1794] イギリスの歴史家。主著は『ローマ帝国衰亡史』。

7 【仏国】フランス。
11 【ハリソン】フレデリック・ハリソン [1831-1923] イギリスの法律家・文学者・哲学者。
12 【セオファーン】一九〇四年に発表されたハリソンの作品。
19 【白眉】多くの中で最も優れているものや人。
【日の出】明治時代に販売されていたたばこの銘柄。

し冗談は冗談だが絵というものは実際難しいものだよ、レオナルド・ダ・ヴィンチは門下生に寺院の壁のしみを写せと教えたことがあるそうだ。なるほど雪隠などに入って雨のもる壁を余念なく眺めていると、なかなかうまく模様画が自然にできているぜ。君注意して写生してみたまえきっとおもしろいものができから。「まただますのだろう。」「いえこれだけは確かだよ。実際奇警な語じゃないか、ダ・ヴィンチでも言いそうなことだね。」「なるほど奇警には相違ないな。」と主人は半分降参をした。しかし彼はまだ雪隠で写生はせぬようだ。

車屋の黒はその後足が不自由になった。彼の光沢ある毛はだんだん色がさめて抜けてくる。吾輩が琥珀よりも美しいと評した彼の目には目やにがいっぱいたまっている。殊に著しく吾輩の注意をひいたのは彼の元気の消沈とその体格の悪くなったことである。吾輩が例の茶園で彼に会った最後の日、どうだと言って尋ねたら「いたちの最後っぺと魚屋のてんびん棒にはこりごりだ。」と言った。

赤松の間に二、三段の紅をつづった紅葉は昔の夢のごとく散ってつくばいに近くかわるがわる花びらをこぼした紅白の山茶花も残りなく落ちつくした。三間半の南向きの縁側に冬の日足が早く傾いて木枯らしの吹かない日はほとんどまれになってから吾輩の昼寝の時間も狭められたよな気がする。

主人は毎日学校へ行く。帰ると書斎へ立てこもる。人が来ると、教師がいやだいやだと言う。水彩画もめったに描かない。タカジャスターゼも効能がないと言ってやめてしまった。子供は感心に休まないで幼稚園へ通う。帰ると唱歌を歌って、まりについて、ときどき吾輩を尻尾でぶら下げる。

吾輩はごちそうも食わないから別段太りもしないが、まずまず健康で足が不自由にもならず

その日その日を暮らしている。ねずみは決して捕らない。おさんはいまだに嫌いだ。名前はまだつけてくれないが、欲をいっても際限がないから生涯この教師のうちで無名の猫で終わるつもりだ。

〈出典 『夏目漱石全集』(筑摩書房、一九八七年)〉

【著者】夏目漱石(なつめ そうせき)

一八六七(慶応三)年―一九一六(大正五)年
作家。東京都の生まれ。

【著書】『こころ』『草枕』『それから』など

1 「レオナルド・ダ・ヴィンチ」[1492-1519] イタリアの画家・彫刻家・建築家。
2 「雪隠」トイレ。せっちゃん。
3 【奇警】発想や言動が奇抜で並はずれていること。
4 【てんびん棒】両端に荷物をつるして、中央を肩に担ぐ棒。
5 【つくばい】茶室の入り口にある手洗い鉢。